

オルタナティブ  
アートネットワーク 2012



オープンスタジオ石引  
活動報告書

# OPEN STUDIOS

# ISHIBIKI

オルタナティブアートネットワーク 2012  
「オープンスタジオ石引」展 実行委員会

オルタナティブアートネットワーク2012

「オープンスタジオ石引」展

スタッフ

日本画: 稲葉星舟(3年)

油 画: 杉本花香(4年)、片岡夏凜(3年)、中野篤人(3年)

藤村結美(3年)、早川 桜(2年)、真鍋淳朗(教授)

彫 刻: 山内翔太(3年)、今西勇太(2年)

芸術学: 阿部美実香(3年)、大井奈津子(3年)、小川綾奈(3年)

猿橋舞子(3年)、福本悦子(3年)、川上明孝(教授)

助 成: 平成24年度金沢美術工芸大学特別研究

協 力: 石引商店街、金沢アートグミ

同展活動報告書 (2013年3月31日発行)

編 集: 上田陽子(金沢アートグミ)

撮 影: 池田ひらく

発 行: 同展実行委員会(真鍋淳朗+川上明孝)

連絡先: manabeju@kanazawa-bidai.ac.jp

オルタナティブアートネットワーク2012「オープンスタジオ石引」

この冊子は、8月14日(火)から8月21日(火)の8日間、石引商店街において開催した「オルタナティブアートネットワーク2012「オープンスタジオ石引」」の活動報告書です。

この展覧会では、金沢美術工芸大学の学生・教員が、授業の一環として、「アートベース石引」を中心に複数のオープンスタジオを出現させ、作家それぞれのコンセプトに基づいた作品の公開制作と展示を行いました。

石引商店街にある空き店舗の中から創作意欲を刺激される場所を探し交渉することから制作が始まりました。オープンスタジオという方式を採用したのは、制作現場を公開することで制作の実態や作家の生態を知ってもらいたい、さらにまた人々の視線や質問や感想に晒されることで作品制作にダイナミズムを呼び起こしたいという狙いのためです。

こうした手法の結果、商店街を行き交う多くの方々が点在する私たちのオープンスタジオに興味を抱き、中を覗き、声をかけてくださいました。制作の姿を見られることは、気恥ずかしくもありますが、気持ちどこか高揚し制作に緊張をもたらしたのも事実です。中には来場者の感想や考えがヒントとなって、予想もしなかった方向に作品が変化していった作家もいます。

この冊子には、作品と批評文をメインに、展示風景や「アートベース石引」の来歴、展覧会広報のチラシや新聞記事、そして参加したメンバーの感想などを、活動記録として掲載しました。ご意見ご感想を寄せてくだされば幸いです。

本展覧会開催にあたり、こころよく場所や時間を提供して下さった石引商店街の皆様、ご指導いただいた先生方、そして本展に来場し参加して下さった全ての方々に対して心よりお礼申し上げます。

平成24年2月7日

オルタナティブアートネットワーク2012

「オープンスタジオ石引」参加学生一同

# INDEX

## ALTERNATIVE ART NETWORK 2012

- 3 概要
- 4 石引商店街について
- 5 作品と批評文

- 01 astro-nuts (稲葉星舟、山内祥太)《石引タイムライン》 猿橋舞子
- 02 今西勇太《オープンスタジオ(石引商店街アーケード)》 大井奈津子
- 03 藤村結美《無題》 小川緩奈
- 04 中野篤人《冒険》 猿橋舞子
- 05 片岡夏凜《つくるのきもち》 福本悦子
- 06 杉本花香《硬さと柔らかさの彼女は自身の中に眠る》 大井奈津子
- 07 早川桜《糸の部屋》 阿部芙実香
- 08 真鍋淳朗《OPEN STUDIOS ISHIBIKI DIARY》

- 22 各種リリース
- 26 メイキング
- 28 感想文
- 30 総評 オルタナティブ アート ネットワーク

[開催日時] 2012年8月14日~8月21日  
11:00~17:00(入場無料)  
[会場] 石引商店街各店舗、アートベース石引  
[主催] オルタナティブアートネットワーク2012“オープンスタジオ石引”展実行委員会  
金沢美術工芸大学 真鍋研究室+川上研究室  
[協力] 金沢アートグミ  
[広報協力] 北國新聞、北陸中日新聞  
[関連イベント]  
「ギャラリートーク」会場:アートベース石引 8月18日(土)18:00~19:30



# OPEN STUDIOS ISHIBIKI



石引商店街は小立野台地の中心部に位置し、現在47の様々な商店が軒を連ねる。石引という地名は金沢城を築く際、戸室山より石を運んだという所から生まれた。周囲には天徳院を始めとした寺院が数多く所在し歴史ある町となっている。金沢美術工芸大学とはその場所の近さから多くの社会連携事業を重ねてきた。2010年に商店街のマスコットキャラクターの公募も行っている。今回の展示で拠点となったアートベース石引は、石引商店街振興組合の協力のもと商店街の空き店舗を利用して作られ、2011年8月に完成した。この空間は、学生の作品展示や講演会などが開催されており、地域と学生の交流の場、情報発信の場として活用されている。





astro-nuts 《石引タイムライン》



金沢市石引地区の石引商店街。金沢美大のギャラリースペースとして作られた「アートベース石引」に開設されたこの空間は、インスタレーション作品を展示する場であり、またそれを制作する作家のオープンスタジオとしても機能している。

インスタレーションには真っ白な四方の壁のうち、入り口を入れて右、正面、左の三方、そして左寄りに立てられた柱が用いられ、そこへコピー用紙に黒く印字され、形に添って切り取られた文字が貼付けられる。また、人の話し声や雑踏の音を収集し、ミックスした音を流す事により、作品が視覚そして聴覚に訴える様に構築されている。

スペース中央から右にかけて、文字を出力するためのPC、プリンタ、音を出力するためのディスクジョッキコントローラ、カメラといった機材、来場者の声を聞くためのテーブルと椅子が置かれており、このスペースがオープンスタジオとなる。

astro-nutsはユニットである。Astoroは宇宙飛行士の名に由来し、nutsは2粒の豆が入ったビーナツを指す。宇宙という未開の空間で様々な実験を行なう2人組という名前を掲げ、彼らは様々な実験(制作)を行なっているのである。

今回の実験材料は「言葉」である。日々私たちが生きていく上で、記録も取られず流れてゆく会話。そして、最近流行を見せているSNS: ソーシャル・ネットワーク・サービス上に流れる文字。そんな何気のない、明確に伝える相手のいない、脳内から反射的に一瞬で発信された言葉達である。

インターネット上を彷徨う文字、雑踏の中の人々の何気ない会話、それらはどちらも言葉で構成される。その出力方法が異なる2つの言葉が視覚と聴覚へ同時になだれ込み、見る者はその行く当てのない情報達の氾濫に巻き込まれる。

素早く、軽く、ただ放り出された言葉達は、ファスト・フード、ファスト・ファッションに並ぶファスト・ワードとでも言うべき存在であろうか。それらの言葉が収集・凝縮されたこの空間に入り込んだ人々は、そこに展示された言葉の意味のなさに笑ったり、魅力を感じたりするだろう。あるいは、個人の剥き出しになった言葉がこれだけ多く貼られているのに、それらのどれもが決して相手を持たないこと、やりとりをしないことに、驚きや恐怖を感じるかもしれない。

この空間におそらく後世まで伝わる様な意味のある言葉は存在しない。しかし、訪れた誰もがその事について不満を口にすることはないだろう。ここにあるのは、私たちがこれから生きようとしている世界の縮図であるかもしれない。そこに立ち、居るほどにその世界に慣れてゆく私たちが観察しようとしている冷静なまなざしが、この空間には存在している。

猿橋舞子



今西勇太《オープンスタジオ(石引商店街アーケード)》



「あ、昨日と形が変わっている。」そんな発見と、実際にそれぞれ鑑賞者の手によって作品に変化を与える体験型の作品である。

作品は展示会の拠点となるアートベースを中心に、石引商店街のアーケードに設置され「オープンスタジオ(石引商店街)」と名づけられた。様々な色の付いた複数絡み合った大樹のようなアルミ線、そしてその周囲には2本組になった色の異なるアルミ線が吊り下げられ、連なっている。その作品を目にする人々がとる対応は様々である。説明書きをじっと見つめて通り過ぎていく人。嬉々として形を変える人、戸惑いながらもアルミ線に触れる人…。「コレはいったい何なのだろう」という興味をその場に生み出していた。石引通りを歩く人たちに見、触れ、感じ、考えるという行為を発生させることも作中に含まれている。

設置されたアルミ線上に現れる形はときに見ず知らずの人間との間で、たどたどしいやりとりをも生み出した。もとの形に対して、思い思いの形を返信する。そんなやりとりが生まれたとき、感じられるのは机の上に描いた落書きへの称賛だったり、同意であったり、そんな返事なんて求めていないはずの言葉が返ってきたときの似た喜びだ。そこには誰とも知らない他人との意思疎通したときの小さな感動がある。アルミ線の変化、というコミュニケーションの軌跡そのものが作品なのである。故にひとつの完成としてその時々を形態を写真で記録するという形式になるが、あくまでもこの作品に完成という形は無い。人々の手によって形を変えながらいつも完全であり、また同時に未完成である。言い換えれば設置された場所ごとに対して、あるいは一人ひとりに対して完成が存在し得るのだ。そのひとつひとつの完成した軌跡はカメラによって記録され、今回のオープンスタジオの中、石引商店街に対しての作品の完成形となるのである。

感動を各々体験することによって、作品は通りを歩く人たちに見、触れ、感じ、考えるという行為を生み出し身近な感覚や感動をもって石引の中で、寄り添う存在となっている。形を変えながらそれぞれの場所や人のほうへ寄り添っていくで作品であるのだ。

大井奈津子



藤村結美〈無題〉

みやば呉服店隣の空き店舗。昼下がり、石引通りに面するガラス張りの入口から西日が差し込み、空間を照らしていた。作者はこの場所で、訪れる人や日々変化する室内外の光景を撮影し、白い壁に貼り付けていくというインスタレーションを行った。

当初、制作のコンセプトは「距離感」という言葉に置かれていた。それはありとあらゆる事物や生物、他者に対して一方的に感じる、精神的な隔絶を意味する。ある対象について考えた時、わからない事や知らない部分が多いと私たちはこの言葉を想起するだろう。それは対象と自身との間にぼかんと広がる空白のようだ。どれだけ近づいても完全に埋まることのないこの空白を、作者はあらゆる関係性のかたちの一つとして捉えた。そして対象によって変化する距離感(=関係性)の視覚化を写真という媒体を用いて試みたのだ。

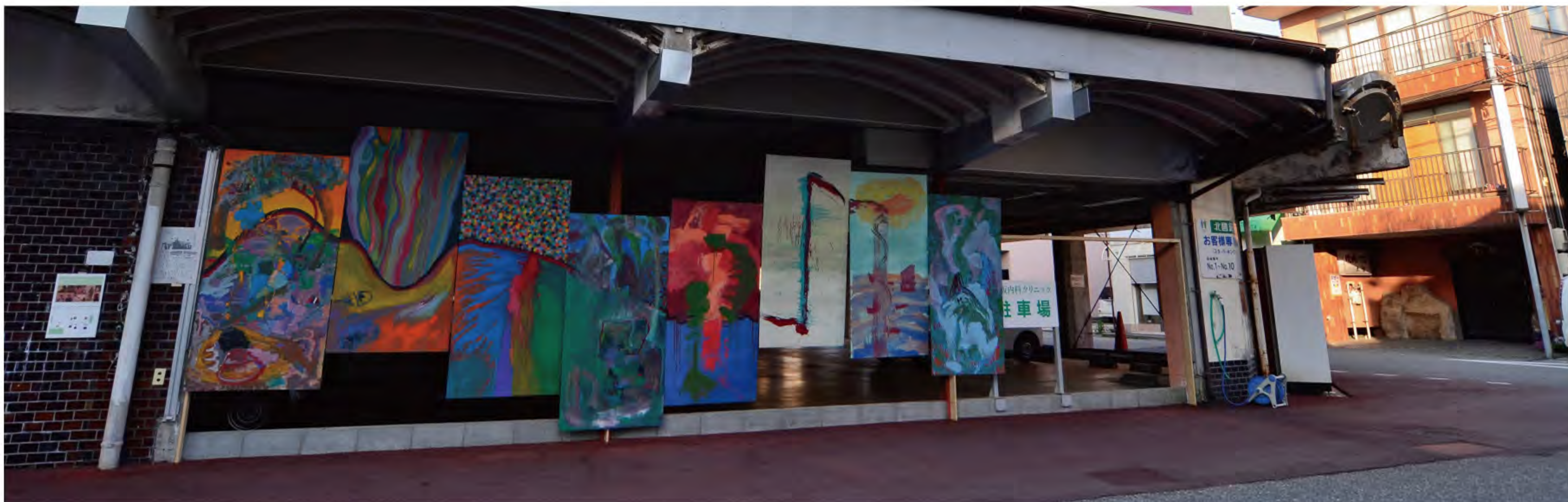
被写体を見つめる瞬間、その人物を想う。作者にとって撮ることは「距離感」を感じるきっかけとなる。また目に見えないそれは写真として記録され、撮る側と撮られる側に共通の記憶となる。公開制作中、作者は訪れた人との「距離感」を撮りためていった。中には通りがかりの人もおり、そうした石引で生活する人々の存在は作品中において町へのつながりを示唆する。また画面はショーウィンドウから日が差し込み、貼かけの写真や「布」が背景にあったことで、特殊な明るさと鮮やかさをまとっている。一方で、過去に撮りためてきた写真もまた作品に取り込まれている。友人や親戚、旅先で出会った少女。それぞれに異なるその時その一瞬の距離感と、日々新たに切り取られた距離感が白い壁に蓄積されていく。他者とのかわりから自己を見つめなおす作者の精神的な活動が実体として広がる。

こうして増殖する写真は、一方で作者が染めた色鮮やかな布によって覆われてゆくのだが、それはなぜだろう。布には二つの意味が込められていると作者はいう。はじめに、作品を見られることに対して作者自身が抱く羞恥の意識。そして一つの作品でも人によって見え方は異なるという鑑賞する側の意識を、異なる色や織りの素材を用いることで表している。作者と鑑賞者、両極からの視線が作品の前の布に現れる。それは鑑賞者と作品を断絶するようにつなぐ、もう一つの「距離感」の視覚化である。

布はまた、写真という平面から空き店舗の空間全体へと作品を導く。その色彩は空間の自然現象と呼応するように、日が当たる入り口付近には赤を中心に暖色、奥に行くにつれ陰の中に寒色が用いられている。

作者の「距離感」を求める活動に終わりはないだろう。しかし今回の制作では場所、そこに固有の環境を受け入れ、取り入れることで、他所では見られない表現が生まれた。

小川緩奈



中野篤人《冒険》

病院裏手の駐車場に、8枚の縦長の薄いベニヤ板に描かれた油絵が掛かっている。一見するとそのどれもがバラバラなものを書いており、並べ掛けられた板も平行でなくた

この場所で作者が表したかったもの、それは生まれ変わった。2度の変化を遂げ、現在は駐である。一日1枚ずつ完成されてゆく8枚の絵画偶然に混ざり合ったものである。

この元廃墟の駐車場というスペースで制作欲とが混ざり合う。2度の変化をしたこの場、

常にアトリエが開かれているオープンスタアが更新されてゆく様子を知る事ができる。そするまで、作者と作品とともに私たちもまたこ

リズムカルな起伏や違いが、この作品に万華鏡の様に変化に富んだ様相を与えている。場内ではなく外側へ表を向けた作品達であるがゆえに風に揺れ、見る者の視線を作品からその奥の空間へと誘導する。

「冒険」である。元々この駐車場はスーパーマーケットの廃墟であった。そして時が経ち、所有者が代わり、廃墟は駐車場として車場として完結しているこの場所、そして時の流れに、この不規則な作品達を置く事で新たなる変化を与えようとしているの

を行なう事により、その積み重ねた時の流れが作者のまなざしに反射し、影響し、作品を構築してゆく。場の時間と、作者の表現その歴史のひだを作者は冒険しているのである。

ジオ形式により、私たちは製作中の作家の表情、のせられてゆく色、使われきったチューブやパレットを眺め、そして作者の冒の変化を毎日目の当たりにすると、実際に制作していない私たちでも徐々にその冒険に惹き込まれてゆく。作品が8日目に完成の空間を冒険し、その体験を経たまなざしでこの場を見る事によって、ここに3度目の変化を与えることになるのかもしれない。

猿橋舞子





片岡夏凜《つくるのきもち》  
「ニコラ」「カバカバ」「さんぽにいくよ！」

もともと店として使われていたこの空間は、人が生活するのに十分な機能を備えていながら、そこにあるだけとなってしまっていた。この場所を彼女は選んだ。十分な広さと作品を邪魔しないシンプルな白い空間。ここでなら自身の思い描く世界が構築できるだろうと考えたからだ。白い内装の空間を彩ったのは絵本の原画だ。ストーリーの構成からもちろん絵に至るまで、全て彼女のオリジナルである。作品は「ニコラ」、「カバカバ」、「さんぽにいくよ！」の3点。事前に練られたストーリーのもと、昼夜を問わず制作を続けた。私自身も担当者として何度か会場に赴いたが、その度に原画の数が増えていて物語の完成が待ち遠しかった。彼女の強みは人物の表情描写の豊かさである。はじけるような笑顔から切なげな表情まで、読者を自然と登場人物に感情移入させてしまう。鑑賞者は彼女の作り出した世界へと誘われてしまうのだ。さまざまな画材を用いて、その繊細な表情の機微やどこか昔懐かしさを感じさせる風景までも思いのままに描き出す。水彩絵の具やパステル、色鉛筆にカラーインクといった道具を用いて画用紙に描かれた登場人物たち。その優しく繊細な色遣いに彼女の内面が現れているようだ。作品は作家に似るといえるが、まさにこのことであろう。ちなみに制作された原画は最終的に製本される予定である。

今回の企画は制作の工程から完成までの様子が鑑賞者に開放されたオープンスタジオ形式である。普段の授業や展覧会では完成品だけを見せることが主流のため、作家自身、制作途中の未完成品を批評されることに違和感があったようだ。なぜなら彼女は完成したものこそ作品と成り得て、そこではじめて批評されるものだという認識を持っているからだ。だからこそすぐそばで第三者の視線を感じながらの制作というのもプレッシャーを与えたことだろう。だが彼女が受けたこの刺激は制作に向けて姿勢をあらたにするきっかけにもなったという。今後もこのような形式の展覧会に対して意欲的ということで、ぜひ機会を設けたいと考えている。

福本悦子



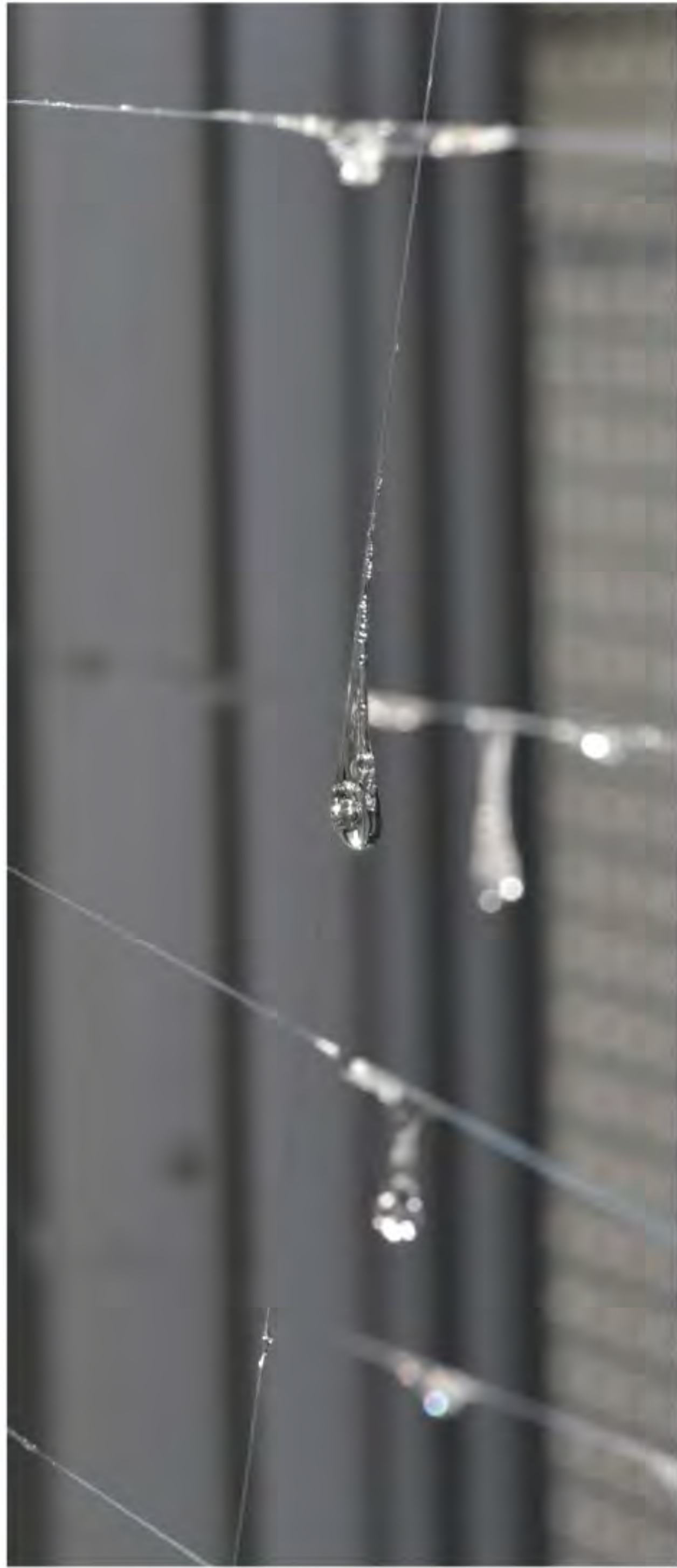
杉本花香《硬さと柔らかさの彼女は自身の中に眠る》

作者は石引商店街でもバス停のすぐ傍にある、比較的人通りが多い場所にオープンスタジオを構えた。ゆえに声をかける人、感想を漏らす人など様々な反応を得ることが出来た。その当初のアイデアスケッチから、これを書いている私自身も実際に制作の手伝いを行ったので作品が様々な変遷を経て完成する様子を間近で経験した。変遷とは石引周辺の方や商店街の方との対話の中であり、オープンスタジオの中で作品の完成像は日々変化していった。そんな中、作り上げられた世界は鮮やかで、どこか死を感じさせるグロテスクさを持ったものになった。

「硬さと柔らかさの彼女は自身の中に眠る」はアトリエという小さな白い空間の中に一人の少女が横たわっている。笑みを含んだ口元であるのに目は空洞でありほっかり闇が浮かんでいるどこか読みきれない表情である。作品の顔は作者自身の顔から原型をとっている。基本の骨格は彼女自身のものであり、どこか面影を感じさせる。人形は作者の写し身や形代(かたしろ)とも言えるだろう。そこには自分の顔を好きなように作りかえられる、という女の子が誰でも一度は持つであろう変身願望が詰め込まれている。しかしそれは同時にグロテスクな感覚をも抱かせる、美しさと人工的に生み出された歪さが奇妙に交わった世界だ。花に埋もれる空の瞳を持つ女性。分裂しているような多数の乳房。取り囲むように、ぼこぼこ増殖する細胞。繋がっていない顔と首。歪さを助長させるそれらの要素は、当初の完成予想には全く無かったものである。対話の中で形代は、日本人形やビスクドールの持つ独特の恐ろしさと少し違った恐ろしさを有する存在になったのである。

作者には精霊や妖精といったファンタジックな世界観があり、これまでも耽美とも言える作品世界を作り出してきた。しかし今回の展示では作者自身の意図していないものが、行きかう人々によって引き出された。それは確かな彼女の世界と他人との綱引きのような関係の中で開かれた、新たに恐ろしさやグロテスクさを含み深まった「杉本花香の世界」である。

大井奈津子



早川桜《糸の部屋》制作協力:小泉冴映香

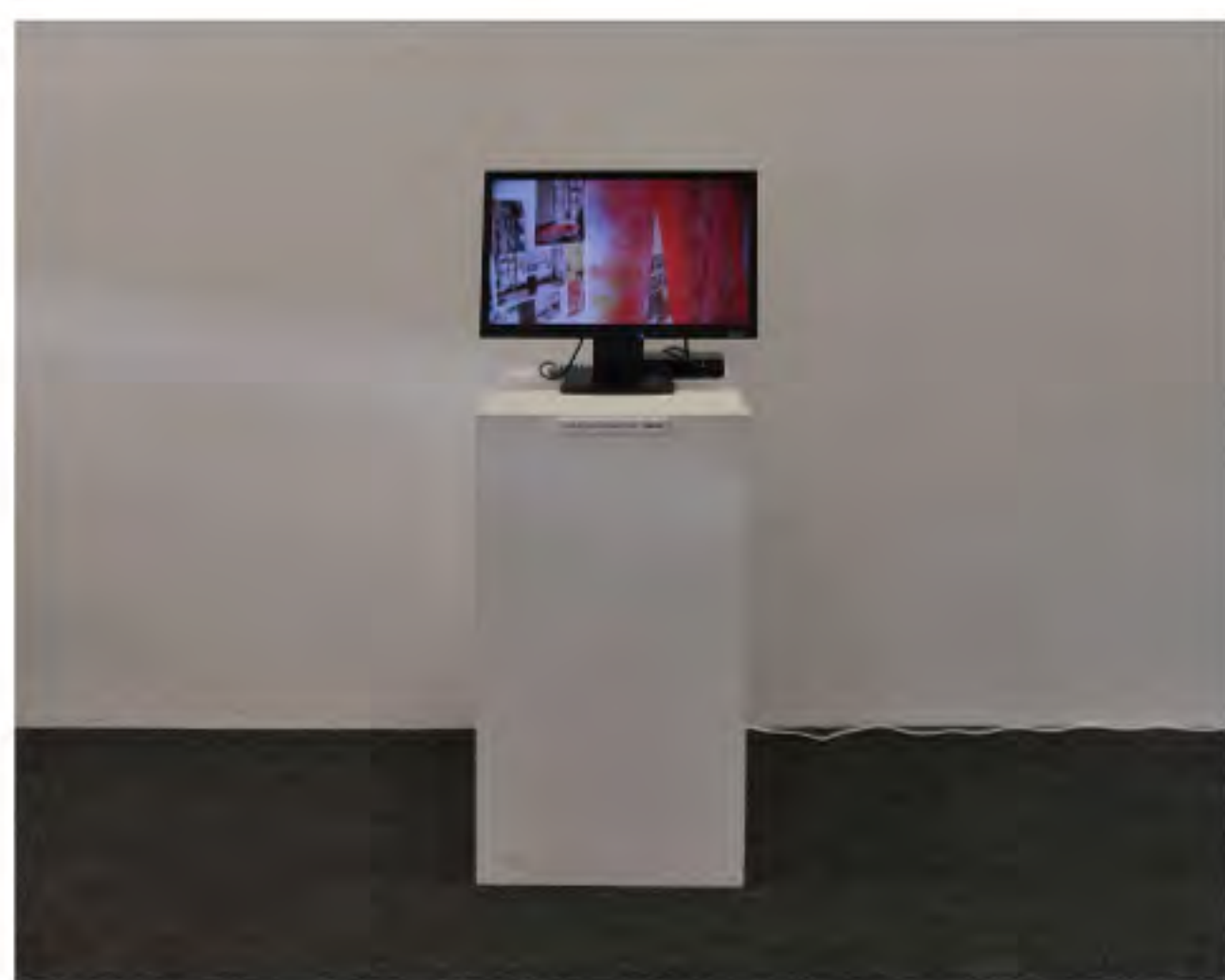
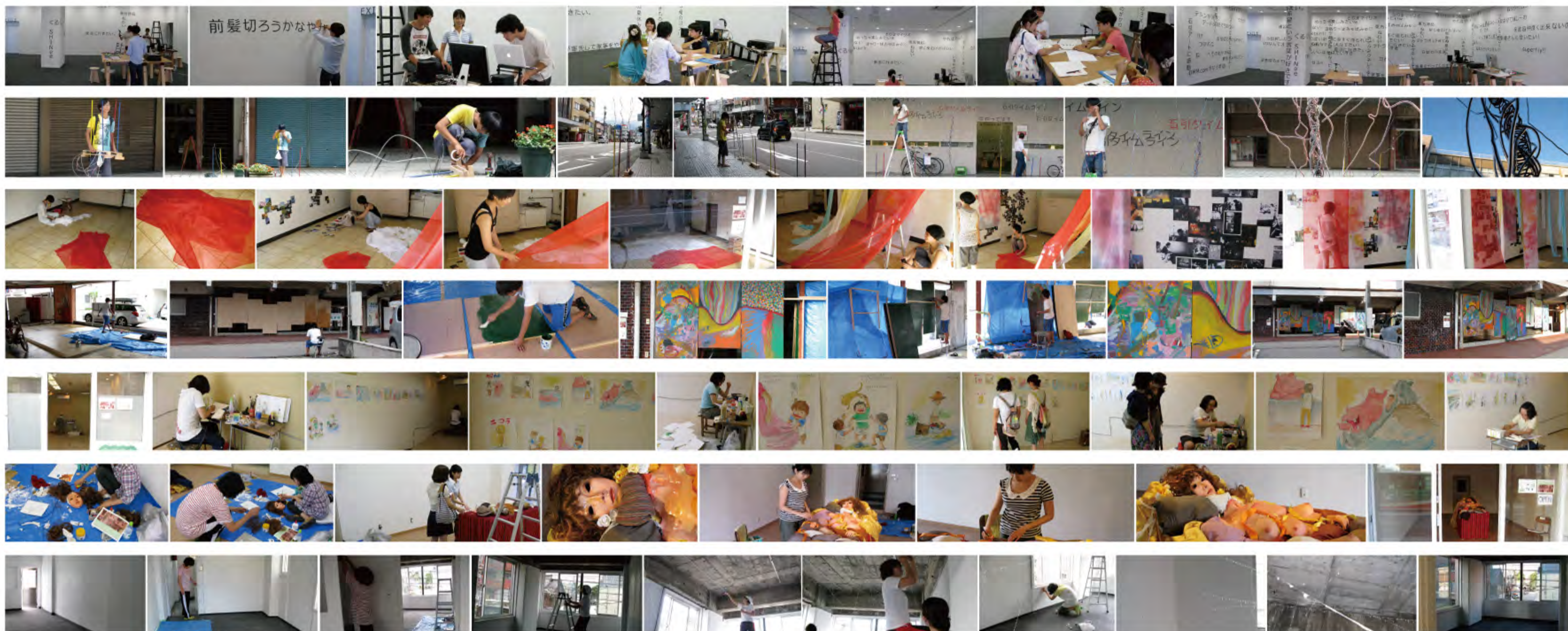
素朴な佇まいを見せる建物に足を踏み入れれば、かつてそこに存在した人の気配を微かに感じることができる、ぼっかりとした白い空間が広がる。目を凝らすと見える一本の線は、空家となつて時間が経つにつれて張られた蜘蛛の糸であろうか。そんな疑問を感じながら階段をのぼり二階へと上がると、部屋中を埋め尽くす透明な糸に目を奪われる。部屋中に張り巡らされた蜘蛛の巣のようなそれは、正面の窓からの光を受けて、その身に纏う雫をきらきらと反射させている。

部屋の隅から隅へとはしませたテグスに透明な接着剤を伝わせ、雨露を思わせる瑞々しい雫を表現した。触れれば切れてしまいそうな繊細な糸は、来訪者がこの空間に立ち入ることを躊躇わせると同時に、朝露をまとった蜘蛛の巣のような、人間の介在しない現象の美しさを巧みに内包している。

油画専攻の学生として平面作品を作ることの多い作者だが、本展覧会においては空間全体を自分の作品とするインスタレーションに挑戦した。かねてより題材に用いることの多かった、誕生、成長、死、そして腐敗というような生命の流れを、オープンスタジオ形式の中で、時間を経るにつれて変化していく作品に投影した。全ての命に平等に流れていく時間。そしていつか必ず訪れる死。それはこの世界においてもっとも自然な原理であり、作者自身がいちばんに魅力を感じている部分でもある。人為的なものは、自然の荘厳さや美しさに勝ることはできないが、自然と自分が一体化できるような、あるいは自然の中から生まれ出てきたような作品を、自分の手で作ることができたらと作者は語る。

いたってシンプルな素材と手法で制作された作品であるが、作者の意図した自然らしさが巧みに表現されている。人気のない納屋の奥で広がる蜘蛛の巣のように、人の生活とは切り離されてしまったこの場所で、人知れずこの糸は増え続けていくのではないだろうか。そんなことを思わせる。

阿部美実香



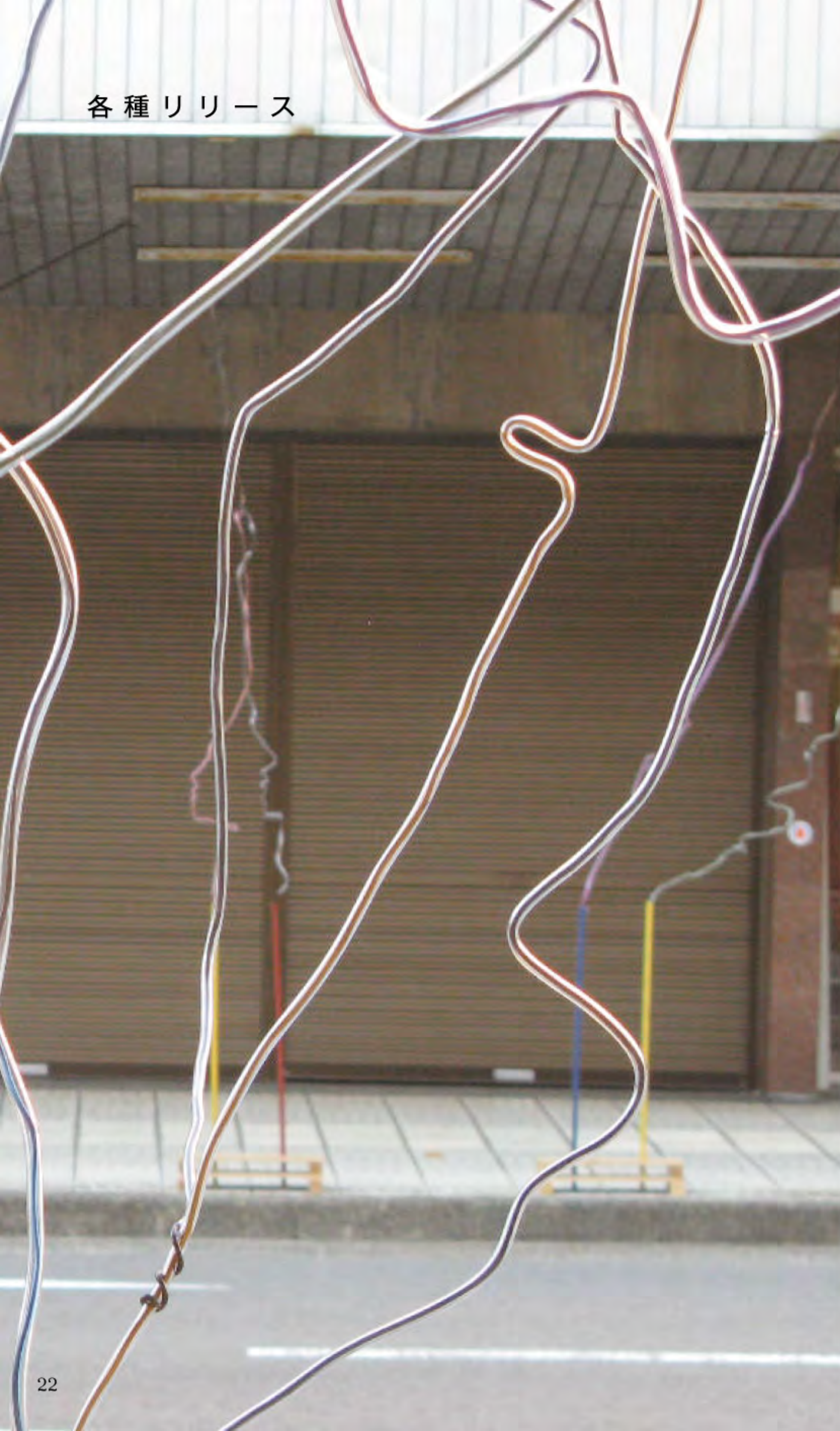
真鍋淳朗《OPEN STUDIOS ISHIBIKI DIARY》

「オープンスタジオ石引」は、アートが社会と直  
 接つながりながら、既存の美術というシステムに変わる場(オルタナティブ スペース)でプロジェクトを開催する意味を  
 問い、今日のアートの在り方を模索するオルタ  
 ナティブ制作の様子が公開され、制作者と鑑賞者  
 環境にも波及効果を与えます。

2012年8月14日から21日までの8日間に、  
 として編集しアートベース石引で公開されて  
 普段とは違った作品が生まれる過程や場の  
 の全過程を時系列で記録し、そのコンセプトを

接つながりながら、既存の美術というシステムに変わる場(オルタナティブ スペース)でプロジェクトを開催する意味を  
 ナティブ アート ネットワークのコンセプトを具現化したものです。オープンスタジオでは、普段なかなか目にすること  
 との距離が近くなります。地域とのコミュニケーションが制作に影響を与えて制作者の可能性の幅を広げ、同時に地域の  
 金沢市石引商店街の空き店舗や路上の8ヶ所で公開制作された作品と制作場所のネットワークを毎日記録し、映像日記  
 いたものがOPEN STUDIOS ISHIBIKI DIARYです。日常の生活空間が日々変容する状態や、その場の影響を受けて  
 特性を取り込んだ制作が現れる状況が記録されています。OPEN STUDIOS ISHIBIKI DIARYは、このプロジェクト  
 視覚化したものです。

真鍋淳朗



# PUBLICITY

メディア掲載情報

**商店街アトリエに**  
石引きょうから1週間  
美大生が公開制作

車場を会場に、作家が鑑賞者とコミュニケーションを図りながら、期間中に作品を作り上げる試みで、商店街に「アート」の輪を広げる。「オープンスタジオ」を主催し、真鍋淳明、川上明孝両教授と学生13人が参加する。ギャラリーではない場所での作品展示は、展示場所アートによってつなげていく。「オルタナティブアートネットワーク」の一環で、学生が作品の企画や制作場所の多様性を担い、生有志が14日から1日まで、石引商店街に期間限定の「アトリエ」を構え、制作風景を公開する。空き店舗や駐

公開制作の準備に取り組み美大生は石引きょうの「アトリエ」に集まり、制作の準備に没頭している。空き店舗で絵本の原画を制作、公開する油画展「アトリエ」が18日、19日は各スタジオを巡る「見学ツアー」が行われる。

制作する。空き店舗を「つなぎを文化化」し、活用したギャラリー「アトリエ」を運営し、空き店舗で絵本の原画を制作、公開する油画展「アトリエ」が18日、19日は各スタジオを巡る「見学ツアー」が行われる。

北國新聞  
2012年8月14日付

**金沢美大生が制作公開**

**空き店舗アート空間に**

「アートが好き。アートな1日でもあついでいい!!」  
「前髪切ろうかな」  
「今日何しよう」  
「補講授業とかい

金沢美大生表天(金沢市)の学生らが、空き店舗を会場に公開制作に挑む。実行委員会は「街を再発見する」とも、個性を見せることのない制作過程を「アート」の輪を広げている。入場無料。展示会は、真鍋淳明教授らが三年前から展開している「オルタナティブアートネットワーク」の一環。既存のもの新しい手法で活用する試みで、これまでは寺や町家を会場に学生らの作品を展示してきた。

今回は商店街を会場に、初の公開制作に挑戦。油画や日本画、彫刻を専攻する学生ら8組が参加し、大学が運営する「アトリエ」を公開制作の準備に没頭している。空き店舗で絵本の原画を制作、公開する油画展「アトリエ」が18日、19日は各スタジオを巡る「見学ツアー」が行われる。

**石引商店街 油画や彫刻など**

点に針  
画など  
画運  
わって  
か、展  
面は、  
着別  
クモ  
間を  
マウ  
業展  
「a  
スト  
タイ  
短マ  
「一  
人や  
わい  
の意  
リント  
ている  
香さ  
示が  
と感  
後五  
学生  
出品  
ある。

北陸中日新聞  
2012年8月17日付



# MAKING メイキング



## 感想文

今回の私達の作品は、来場してくださる方々や、インタビューに応じてくださる皆様のご協力無しには決して成立し得ないものでした。どうすれば石引商店街という生活空間の中でリアクションを引き出す場を構築出来るか、と試行錯誤することができました。ひとつの言葉からまたそれに対する反応、と連鎖的に言葉が広がっていくさまを見れたことを大変嬉しく思います。この展覧会に関わって下さった全ての方へ、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

(日本画 稲葉)

「コレはどういう作品？」と聞かれれば一様コンセプトを答えるが、それは鑑賞者の作品に対する思考を排除してしまうと思う。しかしオープンスタジオでこの質問は避けられないものだ。ならば直接のコミュニケーションはとらないオープンスタジオを提示することはできないだろうか。その考えを軸にプランを変更していった。結果、参加型作品のアルミ線の立体を設置しそれに参加する人を常時記録することによって映像作品の制作現場をつくりだす。というものになった。

金沢美大自体が地域との連携に多発的に動き出している今、私達学生は地域とアートの関わりを真剣に考え行動していきたい。

(彫刻 今西)

今回の展覧会で一番の収穫は、私達の制作活動に対してのアプローチの幅を広げることができたことです。最終的には、空間での仕事に収まりましたが、商店街でのフィールドレコーディングに始まり、中学、高校にアポイントメントをとった上での、インタビュー。それらの活動から得た声、音(生活雑音)のサンプリングなどなど、様々な実験をさせて頂きました。

私達の活動理念として、今あるインフラの中でどう遊ぶか、どれだけカッコイイものができるのか、そしてそれを共有する。というところに重点を置いています。今回は、荒削りながらもそれが達成できたのではないかと感じております。(彫刻 山内)

私は今回初めてオープンスタジオという形式で作品を制作しました。制作風景も含めて作品を見てもらうのは少し気恥ずかしいとも思いましたが、バス亭のすぐ後ろにあるスペースなので様々な人に見てもらえたことはとても貴重な体験でした。そして「何をしているの？これからどうなっていくの？面白いね。綺麗。怖いな。」などたくさんの質問や感想を直接聞くことができました。鑑賞者と会話することで、また違った作品の見かたを発見することもできました。今回のような会話や場がなければこの作品はできなかったと思います。私が普段経験できない環境に身を置いて制作し、それによって商店街も少し変わった場所になり、トータルで変化や発見を楽しむことができる展示になったのではないのでしょうか。これを機にいつとも違う環境や刺激に出会うことを大切にしていきたいと思います。(油画 杉本)

普段絵を描いているときは、様々な事を考えながら最初から最後までずっと一人きりで制作します。しかし今回の展覧会では、たくさんの方々と話し、意見を出し合い、交渉して制作をしました。そのことが私にとって新鮮でした。見に来てくれた方にもたくさんの感想を頂き、自分が作った作品について誰かが考えてくれているという実感が感じられる事が本当に嬉しかったです。最後になりますが、快く場所を貸して下さいました福光屋さん、素敵な批評文を考えて下さった阿部さん、制作を手伝ってくれたさえちゃん、関わって下さった皆さん、皆様方のおかげで楽しく制作ができ、とても勉強になりました。本当にありがとうございました。

(油画 早川)

オルタナティブについて考え、制作・展示場所を探し、その場を意識した作品を作るときには、はじめは難しいと感じることもありましたが、とても充実した時間となりました。

石引の街や人々と関連するような作品にしたいと思い、いつも撮っていた写真を使い表現しました。オープンスタジオ形式の展示ということで、見に来て頂いた人の写真も撮ることが出来、人との繋がりがより強く感じられる空間が作れたのではないかと思います。普段は絵画を制作することが多いですが、今回は写真や布や染料といった素材を使うことが出来て、純粋に楽しむことが出来ました。今後もこのような作品の幅もひろげていければと思います。(油画 藤村)

私は今回のオルタナティブスペースアートネットワークは初参加である。オルタナティブスペースはどこにするかということ毎週プロジェクトのメンバーで話し合うのもとても面白かったし、作家とキュレーターと一緒に場所の確保に奔走するのも、苦労もあったが楽しい経験にもなった。企画は石引商店街で公開制作というものであり、公開制作という試みは前々から興味があり、挑戦してみたいと思っていた。展覧会を終えて、わたしの場合は少し制作を公開する形に反省点があったが、リアルタイムで絵本の原面を描き続け、そしてそれを道行く人に見てもらおうという体験はとても刺激的であった。今回のこの石引商店街の空き店舗で公開制作するというプロジェクトは、商店街と美大の関わりと、私自身の個人的な制作にたいする取り組みを考え直すとてもいいきっかけにもなった。(油画 片岡)

作家の個性を生かしつつ、ひとつの企画としてばらばらにならないための大局をつくることは私たち芸術学の役割でした。全く異なる作風の8人を同企画上でまとめることは容易ではなく、展覧会の方向性が定まるまでとても難航したように思います。しかし、オープンスタジオという形式の中で、その差異が現象として現れていくさまは、なかなか見応えあるものだったのではないのでしょうか。試行錯誤の繰り返しで、けしてスマートに物事を進められたとは言えませんが、失敗も含め、とても良い経験になりました。(芸術学 阿部)

普段目を向けない、あるいは意識せずに通り過ぎてしまう場所に作品を展示し、アトリエを開くこと。これは、作家にとってもキュレーターにとっても挑戦だったと思います。いかにその場所に視線を誘導するか、いかにその空間に意義を持たせ、通りすぎる人々にアピールするかという問題が常に私たちの隣に存在したと思います。ただ意欲だけでは展覧会は成功しない、主観と客観のバランスを保ちつつ冷静に企画を進めて行くことは、大変重要な経験であり、これから何か行動を起こすとき、良い教訓として思い返されることだと思います。(芸術学 猿橋)

今回はオープンスタジオということで、人との関わりが制作にどう影響してくるのか、そのことに期待していました。しかし実際にやってみると、何よりも場所の個性というものを感ぜずにはいられませんでした。不便も利点も含めて、それを取り込むか、選択するか、取り入れるならどこまで？という作家と場所との格闘があるような、第三者の私にはそんな風に思えました。いろんな作家の制作過程を通して、最終的には「オルタナティブ面白い！」と改めて言うまでもない感想に落ち着きました。もちろん、制作途中の作品について作家と話したり、完成を想像したりということはとても楽しくて、オープンスタジオを通して美大にいてもできない経験ができたと思います。

また会場を探すあたり、アートと場所の共存はたとえ一時的でも、どこでもできるわけじゃないと思い知りました。協力して下さいました方々に感謝申し上げます。(芸術学 小川)

多種多様な個性をもつ作家陣に対して、初期段階から展覧会のマネジメントを行なうのは初めての経験でした。大人数ゆえに情報の行き違いもありましたが、一緒に展覧会という大きな作品を作り上げていくような感覚を持ってなんとか「オープンスタジオ石引」が開催できました。私が担当させていただいた二人の作家は、まるで正反対のような作風をオープンスタジオの中で生み出しました。石引に住む方たちの作品に対するリアルな感想が聞かえ、私まで一喜一憂させていただきました。私にとっては、作家にも鑑賞者にも深く感情移入ができた展覧会でした。この経験が良いものなのか悪いものなのかははまだに判断していませんが、これから美術やアートを考えていくときに生かしていけば面白いだろう！と個人的に思っています。貴重な経験ありがとうございました！(芸術学 大井)

今回の企画は制作工程を公開し、展示期間中に作品が出来上がっていくという形式の展覧会でした。そのため作家がどのように制作に取り組んでいるのか、来場者との交流を通じて作品へ何かしらの影響が及んだのか、そういったことまでも見えます。毎日姿を変えるその空間に立ち会うことで、まるで自分も制作をしているかのような感覚になりました。まだ誰も評価したことのない作品について、自分が初めて批評をするという経験はとても緊張しますし、責任を感じました。私が使う言葉ひとつで作品の印象が変わるかもしれない、作者の魅せようとしている意図から離れてしまうかもしれないという恐れがあるからです。だからこそ丁寧に言葉を紡ぎました。作品をよく見ること、人をよく見ること、言葉を大切にすることについてあらためて考えさせていただきました。(芸術学 福本)



## オルタナティブ アート ネットワーク

オルタナティブ アート ネットワークとは、美術館やギャラリーなどの本来アート作品が飾られる場所ではなく、別の機能を持つ場所や建物を作品展示の場として提案し、その各地点をアートによってつなげていこうという取り組みで、2010年度から3年間に渡り継続して実施されました。

2010年度は“オデカケオテラ、オサンボハウサイ”と題し、金沢市芳斉地区の「真福院」、武蔵ヶ辻地区の「金沢アートグミ」の2会場を結ぶ展覧会を開催しました。真福院は、江戸時代に建てられた真言宗のお寺で鞍月用水沿いにあり、現在は、法要やアートイベントを行う場として、そして金沢美大の卒業生2名が入居し住居兼アトリエとして活用されています。金沢アートグミは、村野藤吾の設計により昭和7年に建てられた建物がリノベーションされた北國銀行武蔵ヶ辻支店3階にあり、NPO法人金沢アートグミが展覧会・イベントなどを企画運営しています。

2011年度は“マチヤイロ～新しく染まる町家～”と題し、金沢市芳斉地区にある「松本染物店」と「金沢アートグミ」の2会場を結ぶ展覧会を開催しました。松本染物店は、工房と住居が一体となった大型の町家で昭和7年に建てられました。廃業後、その建物の存続が危ぶまれましたが、この展覧会の後に、工芸家、工業デザイナー、イベントプロダクション会社、金沢美大の卒業生らが入居し、アトリエ、オフィスとして活用されています。

2012年度は“オープンスタジオ石引”と題し、金沢市石引商店街の空き店舗や路上の8ヶ所を結ぶ展覧会を開催しました。オープンスタジオとは、普段なかなか目にすることの無い制作の様子を公開することで、作家と鑑賞者との間で生まれるコミュニケーションが制作のヒントとなり、作家の可能性の幅を広げることを目的としています。この展示で使われた2軒の空き店舗と他の1軒の空き店舗が、金沢美大の学外アトリエとして活用されることになりました。

このように本来アート作品が飾られる場所ではない日常空間を作品展示の場として活用することで、アートの視点による新たな空間の提案が可能となり、何度もメディアに取り上げられ鑑賞者が多く訪れることが、結果としてその空間が再認識されアートを発信する空間へとリノベーションされることにつながって行きます。

このプロジェクトでは、学生達が創作意欲の湧く場所を探すことから始まり、地域の歴史や環境をリサーチし、展覧会のコンセプトを立ち上げ、展示の企画運営を主体的に進め、この報告書完成までの一連の作業工程を1年間かけて実行します。学生達が地域と一体になりながら協同で展覧会を創り上げる過程で、その場の影響を受けて普段とは違った作品が生まれ、また場の特性を取り込んだ制作も現れます。作品群は芸術学の学生による批評文によって分析され、その研究成果がこの活動報告書によって公開され、これからのアートによる地域活性化へ波及することが期待されます。

このように学生達が自主的に社会と直接つながりながら、既存の美術というシステムに変わる場で、今日のアートの在り方を模索して行く研究活動がオルタナティブ アート ネットワークです。

真鍋淳朗